

梅原郁先生略歴

昭和 九年 一月 一日 京都府京都市に生まれる
昭和三二年 三月 京都大学文学部史学科東洋史学専修卒業
昭和三七年 三月 京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学
昭和六一年 五月 文学博士（京都大学）
令和 二年 五月 三日 逝去（享年八六）

【職歴】

昭和四一年 四月 神戸学院大学栄養学部助教授（至昭和四四年三月）
昭和四四年 七月 京都大学人文科学研究所助教授（至昭和五六年三月）
昭和五一年 一月 プリンストン大学研究員（至昭和五一年一二月）
昭和五六年 四月 京都大学人文科学研究所教授（至平成九年三月）
平成 九年 四月 京都大学名誉教授
平成 九年 四月 就実女子大学文学部教授（至平成一五年三月）
平成一五年 四月 就実大学人文科学部教授（至平成一八年三月）

【学術団体役員歴】

平成 九年 七月 日本学術会議会員（至平成二二年七月）

※この他、財団法人黒川古文化研究所の理事・所長、東洋史研究会・史学研究会・東方学会・日本歴史学協会等の理事・評議員・委員等を歴任。また、平成二二年七月、谷口澄夫就実女子大学学長より西嶋文庫目録校正業務を委嘱。

【受賞・叙勲歴】

平成二二年 三月 日本学士院賞

平成二四年 四月 瑞宝中綬章

主要業績目録

梅原郁先生は宋代史を専門とされ、主として政治制度史の研究に取り組みました。梅原史学の中核を成す専著は、『宋代官僚制度研究』（同朋舎出版、一九八五年）と『宋代司法制度研究』（創文社、二〇〇六年）である。内藤湖南（一八六六～一九三四年）が唐宋変革論を提唱して以来、東洋史学界では、唐代から宋代にかけて科学技術が飛躍的に発達するとともに政治・経済・学術など社会のあらゆる面において大きな変化が生じた、と考えられてきた。梅原先生は唐宋変革論を発展的に継承する立場から宋代政治制度史研究を遂行され、その成果を右の二書にまとめられた。

梅原先生の研究は、皇帝による支配を実務面で支える官僚制度の構造とその運用を精緻な分析により解明した点に大きな特徴がある。『宋代司法制度研究』は、宋代において中央政府・地方政府に設けられた司法官制の構造と司法行政の実態を解き明かすことを通じて、唐宋変革論を司法の面から深化させたものである。こうした官僚制度に対する緻密な考証は、『宋代官僚制度研究』においても発揮されている。唐宋変革論では、唐代以前の貴族制（貴族が皇帝を擁して人事権などを握り国政運営を主導する政治体制）から宋代以降の君主独裁制（皇帝が高度に発達した官僚制のもとで政策の最終決裁権を有する政治体制）に移行した、と理解している。それをうけて、『宋代官僚制度研究』は、宋代の官僚の昇進制度を丁寧（丁寧）に復元することにより、君主独裁制の基盤となる官僚制度が唐代から宋代にかけて形作られる過程を明らかにしている。後に著された『皇帝政治と中国』（白帝社、二〇〇三年）においても、秦の始皇帝に始まる皇帝支配の展開を、官僚制度の変遷に留意しつつ平易な文体で概説し、君主独裁制の形成と発展の過程を跡付けている。現在の宋代政治史研究では、君主独裁制という概念そのものへの疑義から、梅原先生の所論も批判的に再検討されている。しかし、梅原先生の政治制度史研究がこうした新たな議論の基盤のひとつであることは確かである。

梅原先生の研究業績を紹介するにあたり、数多くの索引と訳注を忘れてはならない。現在、中国史の基本史料の多くは、台湾中央研究院漢籍電子文獻資料庫などの漢籍データベースを活用することにより、インターネット上で一字検索が容易に可能である。また、オフライン環境でも使用可能な漢籍データベースソフトも充実している。しかしながら、二〇〇〇年代以前には、これらのデータベースが必ずしも十分には普及していなかった。そうした研究環境のもとで、梅原先生は『統資治通鑑長編人名索引』（同朋舎出版、一九七八年）・『慶元条法事類語彙輯覽』（京都大学人文科学研究所、一九九〇年）をはじめとする索引を編み、中国学研究者の利便を図られた。

訳注については、宋代の社会・風俗を知るために必要な基本典籍に注解をほどこされた。たとえば、北宋の知識人が天文・地理・科学技術について綴った沈括『夢溪筆談』、北宋の都・開封の都市生活を克明に書き残した孟元老『東京夢華録』、南宋の都・臨安の社会を叙述する呉自牧『夢粱録』などである。これらの典籍の訳注には他の中国学研究者との共同研究の成果も含まれるが、いずれの訳注事業においても梅原先生は中心的な役割を担われている。梅原先生がたずさわられた訳注事業の対象は宋代の典籍にかぎらず、たとえば前漢の歴史を叙述する班固『漢書』（食貨志・地理志・溝洫志）にも及んだ。これらの訳注の多くは版を重ね、現在でも書店や図書館にて容易に手に取ることができる。基本典籍の訳注の刊行は、宋代史研究の進展を促すのみならず、中国史学の啓蒙にも寄与したといえる。

訳注に関して特筆すべきは、『訳注中国近世刑法志』（創文社、二〇〇二～二〇〇三年）の編纂である。『漢書』をはじめとする中国歴代の正史には、各王朝の法制をまとめた刑法志（刑志）という項目が設けられている。『訳注中国近世刑法志』は、『旧五代史』・『宋史』・『遼史』・『金史』・『元史』・『明史』の刑法志に訳注をほどこしたものである。これらのうち『明史』刑法志の訳注は、『就実女子大学史学論集』第二一～一四号（一九九七～一九九九年）に寄稿された「明史刑法志訳注稿（一～三）」を基礎としている。

『漢書』・『晋書』・『魏書』・『隋書』・『旧唐書』・『新唐書』の刑法志の訳注に関しては、つとに内田智雄編『訳注中国歴代刑法志』（創文社、一九六四年）・『訳注統中国歴代刑法志』（創文社、一九七〇年）が刊行されていた。『訳注中国近世刑法志』は、これらの訳注書の欠を補い、中国正史の刑法志の訳注を完備したという点において、中国法制史研究の分野に大きな足跡を残している。後に梅原先生は『訳注統中国歴代刑法志』に補記を加え、原著の不備を補っている（内田智雄編・梅原郁補『訳注統中国歴代刑法志（補）』、創文社、二〇〇五年）。歴代正史の刑法志の訳注は、梅原先生の手によって内容の充実を増すことになった。

最後に、梅原先生が就実学園に遺された学術的財産として、西嶋文庫に関わる事業を紹介しておきたい。西嶋文庫は西嶋定生先生（元就実女子大学文学部史学科教授）の旧蔵書を収めた文庫で、就実大学・就実短期大学附属図書館の四階に設置されている。西嶋先生が収集された多種多様な書籍や、国内外の研究者から寄贈された学術論文等の抜刷、調査旅行の際に撮影された写真のネガなどが収蔵されている。また、西嶋先生の旧宅（千葉県我孫子市）から移築した書齋も、先生が逝去された当時のままの状態で見せられている。梅原先生は長澤和俊先生（当時、就実女子大学文学部史学科教授）・中田實氏（当時、東京大学図書館員）らとともに西嶋先生の旧蔵書を整理し、中田氏との共同で『西嶋文庫蔵書目録』（就実大学、二〇〇一年）を編纂された。西嶋先生の旧蔵書の整理にあたっては、旧宅の書庫の配置を尊重することを心がけたという。現在でも西嶋文庫所蔵の書籍等は、旧宅の書庫の並び順通りに配架されており、西嶋先生が蔵書を丁寧に分類・整理されていた様子を伝えている。改めて言うまでもなく、西嶋先生は戦後日本を代表する東洋史学研究者である。西嶋文庫は就実学園のみならず、東洋学の分野においても貴重な財産である。その保存事業を主導した梅原先生の功績は甚だ大きなものといえるのである。（渡邊将智）

1 書籍

【単著】

- | | | | |
|----------|-------|-------|----|
| 文天祥 | 人物往来社 | 昭和四一年 | 六月 |
| 宋王朝と新文化 | 講談社 | 昭和五二年 | 五月 |
| 宋代官僚制度研究 | 同朋舎出版 | 昭和六〇年 | 二月 |

皇帝政治と中国
宋代司法制度研究

白帝社
創文社

平成一五年 一月
平成一八年 二月

【共著・編著】

中国近世の都市と文化（編著）
中国近世の法制と社会（編著）
前近代中国の刑罰（編著）
中国史（三）
亡国の皇帝 隋の煬帝・宋の徽宗・明の崇禎帝

京都大学人文科学研究所
京都大学人文科学研究所
京都大学人文科学研究所
山川出版社
講談社

昭和五九年 三月
平成 五年 三月
平成 八年 二月
平成 九年 八月
平成一〇年 四月

【訳注】

夢溪筆談

平凡社

昭和五三年二月、
五六年一月

東京夢華録（共訳注）

岩波書店

昭和五八年 三月

宋名臣言行録

同朋舎出版

昭和六一年 九月

名公書判清明集

同朋舎出版

昭和六一年 二月

漢書食貨・地理・溝洫志（共訳注）

平凡社

昭和六三年 七月

東京夢華録 宋代の都市と生活（共訳注）

平凡社

平成 八年 三月

夢梁錄 南宋臨安繁昌記

平凡社

平成二二年七月十一日

訳注中国近世刑法志

創文社

平成一四年三月

一五年二月

訳注続中国歴代刑法志(補)(訳注補記)

創文社

平成一七年 二月

宋名臣言行録

筑摩書房

平成二七年 一二月

【索引】

遼金元人伝記索引(共編)

京都大学人文科学研究所

昭和四七年 三月

続資治通鑑長編人名索引

同朋舎出版

昭和五三年 五月

東京夢華録・夢梁録等語彙索引

京都大学人文科学研究所

昭和五四年 三月

建炎以来繫年要録人名索引

京都大学人文科学研究所

昭和五八年 六月

続資治通鑑長編語彙索引

同朋舎出版

平成 元年 一月

慶元条法事類語彙輯覧

京都大学人文科学研究所

平成 二年 三月

宋会要輯稿編年索引

京都大学人文科学研究所附属東洋学文献センター

平成 七年 三月

【蔵書目録】

西嶋文庫蔵書目録(共編)

就美女子大学図書館

平成一三年 三月

2 論文

宋代地方小都市の一面 鎮の変遷を中心として	史林四一巻六号	昭和三三年	一月
宋代商税制度補説	東洋史研究一八巻四号	昭和三五年	一月
土地制度問題をめぐる宋代研究の動き 周藤吉之教授の業績を中心として	東洋史研究一九巻三号	昭和三六年	一月
南宋淮南の土地制度試探 宮田・屯田を中心に	東洋史研究二一巻四号	昭和三八年	七月
北宋時代の布帛と財政問題 和預買を中心に	史林四七巻二号	昭和三九年	五月
元代差役法小論	東洋史研究二三巻四号	昭和四〇年	三月
南宋折帛錢をめぐると一考察	史林四八巻三号	昭和四〇年	五月
宋代の地方都市	歴史教育一四巻一二号	昭和四一年	二月
都市の発達	中国文化の成熟	昭和四四年	三月
両税制の展開 五代・宋の租税制をめぐって	歴史教育一七巻九号	昭和四四年	一〇月
清朝の行政制度	中華帝国の崩壊	昭和四四年	二月
王安石の新法	岩波講座世界歴史九	昭和四五年	二月
宋代都市の租賦	東洋史研究二八巻四号	昭和四五年	三月
宋代の戸等制をめぐって	東方学報京都四一冊	昭和四五年	三月
宋代の内蔵と左蔵 君主独裁制の財庫	東方学報京都四二冊	昭和四六年	三月
宋代茶法の一考察	史林五五巻一号	昭和四七年	一月

青唐の馬と四川の茶 北宋時代四川茶法の展開
 司馬光と王安石 保守と革新
 宋初の寄禄官とその周辺 宋代官制の理解のために
 五代・宋・元
 宋初の開封と都市制度
 一九九七年の歴史学界 回顧と展望 五代・宋・元
 開封 新しい時代の百万都市
 宋代の中国、元代の中国
 宋代の恩蔭制度
 唐陵と宋陵
 宋代銓選のひとこま 薦挙制度を中心に
 文天祥
 十三世紀の百万都市 杭州のうちそと
 文字の建築
 塩の専売と中国社会
 歴史地理学
 宋代の救済制度 都市の社会史によせて
 宋代の武階

東方学報京都四五冊 昭和四八年 九月
 歴史と人物十一月号 昭和四八年 一月
 東方学報京都四八冊 昭和五〇年 二月
 日本における歴史学の発達と現状四 昭和五一年 三月
 鷹陵史学三・四号 昭和五二年 七月
 史学雑誌八七編五号 昭和五三年 五月
 月刊百科二〇三号 昭和五四年 八月
 図説世界の歴史Ⅱ 昭和五四年 一〇月
 東方学報京都五二冊 昭和五五年 三月
 法帖大系淳化閣帖二卷月報 昭和五五年 一〇月
 東洋史研究三九卷四号 昭和五六年 三月
 新名将言行録中国篇 昭和五六年 四月
 月刊百科二三三号 昭和五七年 三月
 空間の原型 昭和五八年 三月
 月刊百科二四八号 昭和五八年 六月
 アジア歴史研究入門三卷 昭和五八年 一月
 都市の社会史 昭和五八年 一月
 東方学報京都五六号 昭和五九年 三月

南宋の臨安

中国近世の都市と文化

昭和五九年 三月

宋代胥吏制度の展開

一〇世紀以降二〇世紀初頭に至る中国社会の権力構造に

関する総合的研究

昭和六〇年 三月

元祐党籍碑の周辺

書道芸術一月号

昭和六一年 一月

中国史の中の長江

長江文明と日本

昭和六一年 二月

Civil and military officials in the Sung : The chi-lu-kuan system

ACTA ASIATICA 50

昭和六一年 三月

南宋・元の中国

日本の歴史一一

昭和六一年 六月

北宋開封尹小考

東方学会創立四十周年記念東方学論集

昭和六一年 六月

皇帝・祭祀・国都

歴史のなかの都市

昭和六一年 一〇月

泉州の天下第一橋 蔡襄と万安橋の背景

墨二月号

昭和六三年 二月

宋代の形勢と官戸

東方学報京都六〇号

昭和六三年 三月

拙訳『清明集』に対する高橋芳郎氏の「訂誤」について

名古屋大学東洋史研究報告一三三号

昭和六三年 一二月

宋代両税制度略考 一中国王朝の徴税体系

国家 理念と制度

平成 元年 三月

中国都市、城壁のイメージ

イスラムの都市性研究報告一八

平成 元年 三月

宋代の郷司 その位置づけをめぐって

劉子健博士頌寿記念宋史研究論集

平成 元年 九月

司馬光・王安石・蘇軾

世界の歴史四九

平成 元年 一〇月

消えたミドリシジミ

健康一一月号

平成 元年 十一月

宋代の戸口問題をめぐって
宋代都市の房隄とその周辺

旧中国の都市

東洋学の系譜 加藤繁

六千キロの長江を下る

十三世紀の軍事力 南宋軍

唐宋時代の法典編纂 律令格式と勅令格式

中国法制史雑感 元豊の官制改革をめぐって

花と中国文化 中華羣芳

国都における年中行事 天地の祭り

刑は大夫に上らず 宋代の官員処罰

罰俸制度の展開 旧中国における懲戒

宋代の贖銅 官員懲戒のひとつま

万里の長城とはなにか 中国史のなかの長城

宋の徽宗

「状元」の人たち その人生模様

東方学報京都六二号

平成 二年 三月

布目潮瀨博士古稀記念論集東アジアの法と社会

平成 二年 五月

月刊しにか一巻四号

平成 二年 七月

月刊しにか一巻六号

平成 二年 九月

世界の歴史別冊

平成 三年 五月

チンギスハーン下巻

平成 三年 一〇月

中国近世の法制と社会

平成 五年 三月

歴史と社会の中の法

平成 五年 五月

植物の世界一六〇四五号

平成六年七月

七年二月

月刊しにか五巻一二号

平成 六年 一二月

東方学報京都六七号

平成 七年 三月

宋元時代史の基本問題

平成 八年 七月

前近代中国の刑罰

平成 八年 一二月

月刊しにか八巻二号

平成 九年 二月

亡国の皇帝

平成一〇年 四月

月刊しにか一〇巻一〇号

平成一一年 九月

宦官が姿を消した時代 宋代の政治と宦官	月刊しにか一一卷一 一号	平成二二年	一 一月
進奏院をめぐる 宋代の文書伝達制度	就実女子大学史学論集一五号	平成二二年	一 二月
鄯善国の興亡 楼蘭の虚実	流沙出土の文字資料	平成一三年	二 月
『金玉新書』と宋代の遞鋪	就実女子大学史学論集一六号	平成一三年	一 二月
酷吏伝の諸相	就実女子大学史学論集一七号	平成一四年	一 二月
公罪・私罪の一考察 宋代の事例を中心として	就実大学史学論集一八号	平成一五年	七 月
宋銭の裏表	古文化研究八号	平成二一年	三 月
日本と中国の出土銭 北宋銭を中心として	東方学一一八輯	平成二一年	七 月
中国渡来銭の謎	古文化研究一〇号	平成二三年	三 月
中国渡来宋銭の性格	出土銭貨三一号	平成二四年	五 月
3 訳注			
宋史刑法志訳注稿(上)(共訳注)	東方学報京都六四冊	平成 四年	三 月
宋史刑法志訳注稿(下)(共訳注)	東方学報京都六五冊	平成 五年	三 月
旧五代史・遼史・金史刑法志訳注稿(共訳注)	東方学報京都六六冊	平成 六年	三 月
元史刑法志訳注稿(一)(共訳注)	東方学報京都六七冊	平成 七年	三 月
元史刑法志訳注稿(二)(共訳注)	東方学報京都六八冊	平成 八年	三 月
元史刑法志訳注稿(三)(共訳注)	東方学報京都六九冊	平成 九年	三 月

明史刑法志訳注稿(一)	就実女子大学史学論集一二号	平成	九年	一二月
明史刑法志訳注稿(二)	就実女子大学史学論集一三号	平成	一〇年	一二月
明史刑法志訳注稿(三)	就実女子大学史学論集一四号	平成	一一年	一二月
4 書評				
漆侠『王安石变法』	東洋史研究一八卷三号	昭和	三四年	一二月
東京教育大学アジア史研究会宋代史研究部『宋代経済史』上	東洋史研究二〇卷二号	昭和	三六年	一〇月
河原由郎『北宋期・土地所有の問題と商業資本』	東洋史研究二三卷二号	昭和	三九年	一〇月
中国刑法志研究会『通制条格の研究訳注』第一冊	東洋史研究二四卷一号	昭和	四〇年	九月
周藤吉之『唐宋社会経済史研究』	東洋史研究二五卷三号	昭和	四一年	一二月
熊本崇「熙寧年間の察訪使 王安石新法の推進者たち」	法制史研究三八号	平成	元年	三月
熊本崇「中書檢正官 王安石新法のにないてたち」	法制史研究三九号	平成	二年	三月
中嶋敏編『宋史選挙志訳注』一	法制史研究四三号	平成	六年	三月
鳥居一康『宋代税制史研究』	法制史研究四四号	平成	七年	三月
佐竹靖彦「作邑自箴の研究 その基礎的再構成」	法制史研究四五号	平成	八年	三月
柳田節子『宋元社会経済史研究』	東洋史研究五五卷四号	平成	九年	三月
川村康「宋代配役考」	法制史研究五一号	平成	一四年	三月

5 翻訳

劉宰小論 南宋一郷紳の軌跡(劉子健著)

東洋史研究三七卷一号

昭和五三年

六月

6 追悼文

中国史縦横に体系づけ 宮崎市定氏を悼む

朝日新聞夕刊五月二十七日号

平成 七年

五月

清明集のころ 宮崎先生追悼録

東洋史研究五四卷四号

平成 八年

三月

武藤先生と父

誠の人武藤誠先生追悼録

平成 八年

四月

佐伯富先生追悼

東方学一一三輯

平成一九年

一月

追悼 日比野丈夫博士の想い出

東方学一一五輯

平成二〇年

一月

7 文部省科学研究費補助金研究報告書

前近代中国における法制と社会(一般研究(A)、研究代表者)

平成 五年

三月

欧州所蔵中央アジア出現簡牘他法制文書の総合的調査(国際学術研究、研究代表者)

平成 八年

三月

宋代司法機構の総合的研究(基盤研究(C)、研究代表者)

平成一七年

三月

8 その他

あとがき

梅原末治『銅鐸の研究』

昭和六〇年

一月

不可解な学士院の「授賞延期」

朝日新聞夕刊六月二〇日号

昭和六三年

六月

『中国近世刑法志』の訳注を了えて

創文四五一号

平成一五年

三月